

'20

後期日程

# 小論文

(社会情報学部)

## 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は1冊(6頁)、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。





次の文章を読んで、後の2つの問いに答えなさい。

1995年の阪神淡路大震災では多くの一般の人々が復旧支援のボランティアとして現地に駆け付け、「ボランティア元年」とも呼ばれるが、他方、さまざまな問題も生じた。その後、それらの問題については対応に関するノウハウも蓄積され整理されて、以後のボランティア参加のあり方に生かされているようである。振り返って、心理的支援についてはどうであろうか。

宮城県仙台市に居住する筆者は、東日本大震災に際して特に生命にかかわる危険や家の倒壊などもなかったが、家族との連絡の取りにくさ、家財の散乱やライフラインの欠如、勤務校におけるさまざまな被害など、多くの仙台市民と同様の被災体験を持ち、また勤務校における学生相談の責任者として被災学生の支援等にかかわった。また、臨床心理士として、さらに研究者個人としても、被災者支援および他地域からの支援についてさまざまなかかわりを持った。そのような中で、自分自身も被災に関する複雑な感情を経験した。たとえば、被害の大きい人々に対して遠慮やうしろめたさなどを感じる一方、他地域からの「外部」の支援者に対してはその発言等に違和感を持つこともあり、もっと現地の状況を踏まえてほしいと感じながら、さらにこのようないわばひねくれた心情も被災の影響かと内省することもあった。また、心理的支援について考える中で、そもそも自分自身はこれまで国内外の他の災害・被害に真摯に向き合ってきたか、遠い場所でのこととしてきちんとかかわってこなかったのではないか、という自責感さえ持つことがあった。

われわれの被災体験は複雑に層をなしている。被災地域とそれ以外という対比では、例えば同じ仙台市であっても、沿岸部の津波浸水地域と筆者の居住する仙台市西部とでは、被害の程度・内容がまったく異なる。また、より大きな地域区分で見れば、例えば宮城県は被災程度の違いを内包しながらも「被災県」として発言する一方、被災地とは見なされない東京都においても揺れが小さかったとはいえ帰宅難民などが生じている。また、例えば福島県では、放射線の影響で居住地域から避難せざるを得なかった人々と受け入れ先の地域住民との軋轢も報道された。さらに、同じ津波浸水地域の被災者間でも、例えば、住宅の流出・全壊と半壊などの被災程度の違い、仮設住宅と見なし仮設などで受ける支援の違い、地域による復興状況の違いな

ど、さまざまな差異が生じており、また支援に際して耳にする被災者の話からは、それについて表立って話題にできないような複雑な感情を持っていることが伺える。

このように、被災体験については多様かつ重層的な違いがあるのに対し、外から見る「被災者」のイメージはパターン化されているようにも思われる。東日本大震災から1年半ほどして、朝日新聞の地方版コラムに、「『求められる被災者像』って？」と題する記事が掲載された。東京や全国からのマスコミ取材は、被災地の人々の実際の状況を捉えるのではなく、分かりやすい「被災地の反応」を求めているようだ、という地元記者からの問題提起であった。マスコミは、被災地の反応としてわかりやすい「想定内」の記事を求め、あるいはまた、たとえば宮城を根拠地とする野球チーム・楽天の勝利に際しては、被災者の希望になるような明るいインタビューを取ろうとするが、実際には被災者の気持ちはそのようなものではないこともある、という指摘である。遠隔地の人々に被災地の様子を知らせることは大切であり、また被災した人々のために明るいニュースを届けることも必要だとしても、実際には、被災者一人一人の心理状態はさまざまである。「打ちひしがれる被災者」あるいは逆に「明るい話題に喜ぶ被災者」といった、わかりやすい、また一律のイメージでとらえることは不適切と言えよう。この記事はマスコミの対応に関する問題提起ではあるが、同じようなことが、<sup>(1)</sup>心理的支援の際にも生じていないだろうか。現地の人は弱く打ちひしがれている・落ち込んでいる、だから私の・われわれの支援こそが役に立つのだ、という一律のイメージで、心理的支援を行うことはないだろうか。むしろ心理的支援であればこそ、このような点には十分な配慮が必要と思われる。

これは筆者のまったく個人的な体験であるが、発災数年後にテレビのローカルニュースを見ていた時、ふと、ニュースのほぼすべての項目の冒頭が、枕詞のように「東日本大震災で被害を受けた〇〇では」という表現で始まることに気がついた。数年が経過したとはいえ、東北ではまだおおかたの事柄は震災によるダメージと切り離して考えることはできないのだ、ということを実感した瞬間であった。自身が直接に大きな被害を受けてはいない筆者でさえ、日常の中でときどき、「震災がなかったらよかったのに…」と思うことがあった。しかしながら、たとえば倒壊した家が再建され、街並みが以前と同じように復旧したとしても、亡くなった人々はもちろん、さまざまな物や事柄、およびそれらの関係性などが以前と同じ状態に戻ることは

なく、東日本大震災が「なかった」ことにはできないのである。被災するということは、その体験を抱えながら、新たな生活や人生を生きていくことであり、自身の物語の中に、被災体験をあらたに紡ぎこんでいくことに他ならない。災害に際して心理的支援を行う際には、人々のさまざまなかつ複雑な心情に配慮し、一人一人の体験を尊重したかかわりが重要と考える。

東日本大震災に際しては、当時の筆者の立場もあって全国からさまざまな心理的支援の協力や申し出を頂くことがあり、あらためて心からの感謝の意を表するものである。しかしながら、被災状況の問い合わせ、資料提供、支援・調査希望、連携申し入れ等の連絡が次々に入る現状に対し、地震直後に自宅の停電が続く中ではパソコンの使用もままならず、また勤務校ではもちろん職務上の役割がまず優先され、臨床心理士としての心理的支援にかかわるさまざまな問い合わせ等に関連して必要になる名簿等の書類は、個人研究室のパソコンや書籍が散乱する中、建物自体が立ち入り禁止となってしまう探し出すこともできず、という状況であった。したがって、善意によるありがたい申し出とはいえ、まずはその対応自体に苦慮することも多かった。

「現地役に立つ支援になっているか」という点から自身の体験を振り返ると、たとえばウェブ上での各種学会等による心理的支援に関するさまざまな情報提供は、(被災数日後にパソコンが使えるようになってからではあるが)支援者としての筆者にとって実際に役に立つものであった。これは、現地の人々が必要に応じて使える、という点に特徴があったと考えられる。いいかえれば、ウェブ上の情報は、現地の支援者にとって侵襲的ではなく、主体的に選択し活用できるものであった。対比的にいえば、現地の支援者が何かを「強いられる」ような支援は、もちろん善意で行われる支援とはいえ、現地の役に立つ支援とはなっていない、ということである。また先述の通り、パソコンやメール使用の不便、関連資料の散逸などの状況下でまず本務校における役割がある中では、震災直後の県外からのさまざまな申し出など、時には同じ機関の異なる部門からの重複する連絡などへの対応には「余計な手間」を要することになる。今後の災害支援を考える際には、現地関係者への接触前に、あらかじめ外部の関係者間で「交通整理」のようなシステムを作っていくことも必要と思われる。

このような被災地の居住者としての経験、また支援者としてのさまざまな場における関わりとそこで感じたことや現地の人々から見聞いたこと、そのほか災害支援にか

かわる直接・間接の情報から心理的支援のあり方についていくつか考えさせられる点があった。

…(中略)…

I. たとえば、災害の後、当初の混乱が一段落して学校が再開される時期に、小中学校などに対して外部からイベントの申し出がある場合を考えてみよう。被災して気持ちも落ち込みがちな時に楽しいイベントが提供されることは、子どもたちの気持ちが明るく元気になる機会として、学校としても大変ありがたく望ましいものと思われる。他方、学校の再開は子どもたちにとって日常性の回復を意味するものであり、心理的健康のためにも重要な意義を持つ。もしもイベントの申し出を受け入れるために学校側で何らかの準備をする必要が生じ、教師の時間をそちらに多く割くことになれば、それは学校再開の妨げとなる可能性もあり、イベントの開催は残念ながらマイナスの意味も持つことになってしまうであろう。また、イベントの体験が楽しいものであるほど、場合によっては、イベントが終わり慰問の芸能人など関係者が去っていく寂しさが、かえって被災の辛さを増すと感じる子どももいるかもしれない。

もちろん、ここで論じる趣旨は、そのようなイベントの提供を否定することではない。しかしながら、何らかの支援の提供を考える際に、相手の状況を思いやり、相手のニーズを見極め、そのタイミングで行うことが適切かどうかを考えることは、必要な心理的配慮であり、それがあって初めて、善意の支援が実際に生きたものになると言えよう。

II. たとえば、災害の発生直後から、小中学校の教師を対象とするさまざまな研修会が企画されることがある。被災によって子どもたちは不安が募るなどさまざまな心理状態を経験すると考えられるため、子どもたちへの関わり方は重要であり、教師が適切な対応を知っておくことには意味がある。したがって、教師を対象とする研修は有意義なものといえる。一方、多くの場合、現場の教師は自身の被災も顧みず子どもたちのために奮闘しており、さらに研修開催の案内があれば、子どもたちのことを思うが故に無理を押し付けてでも研修に参加していくという傾向がある。しかし場合によっては、大学や教育委員会からの案内であるために断りにくく、呼びかけに応じて多くの研修に参加することで、かえって教師自身の研修疲れを招くこともあると考えられる。たしかに、研修の成果を生かして子どもたちに適切な関わりを持つことは有意義

であろう。とはいえ、不眠不休で頑張る教師に対しては、それまでの実践を尊重し<sup>ねぎら</sup>労いながら、まずは少しでも自宅に戻って休んでほしいとも感じる。教師が元気であることこそが子どもたちにとって大切であり、研修はその後に少し余裕が出てからのこととしてもよいのではないかと思える場合がある。子どもたちの心理的健康のために教師に対する研修が必要だと考える支援者には、今この時期に研修を受けることが適切であるかどうか、教師の心理的健康についても一考を求めたい。

Ⅲ. たとえば、子どもたちに対して、さまざまな物品の支援が行われることもある。家や学校が被災して学習に必要な物品に不自由する場合、このような支援は直接的に役に立つ。なにによらず、不足している物が補充されてありがたい、というのは当然のことである。しかしながら、たとえば子どもたちの人数に対して支援される物品の数が十分でない場合、配分には工夫が必要であり、学校の教師はそのためにまた時間とエネルギーを割かれることになる。被災地では当然ながら教師自身も被災者である。自身の被災を顧みず学校で子どもたちを守ろうと懸命の努力を続けている教師にとって、中途半端な物品の支援はよけいな仕事を増やすものになってしまう、といっっては言葉が過ぎるであろうか。

また、たとえば受けた支援に対して子どもたちが礼状を書くこともあり、いわば美談として報道されることも目にする。受けた親切に対してお礼を伝えることは当然の礼儀であり、教育上もよい機会ではあろう。さらに、最近の心理学の知見では、他者に感謝の気持ちを持つあるいは感謝を具体的に示すことは、心身の健康に有効であることが確認されている。したがって、単に礼儀を学ぶ機会となるだけではなく、子どもたち自身の幸福感を増すことになる点で、支援に対する礼状を書くことは、受けた支援そのものに加えてさらにプラスの効果をもたらすといえよう。とはいえ、もしも礼状を書く時間を確保するために、学校再開に向けた活動時間が削られるようなことがあれば、これはまたマイナスの側面を持つことになってしまう。さらにいえば、もしこのようなことが重なり(実際、被災地では一度と限らず何度もさまざまな支援を受けることがある)、子どもたちがさまざまな場面でお礼を言う・礼状を書くことが多くなっていくとしたらどうであろうか。もし、子どもたちがいつも支援をされる側・お礼を言う側ばかりになっていくとしたら、子どもたちの自尊心やコントロール感に影響はないのだろうかと思念される。一般に、震災などの体験においては、自分に

はなすすべもなかったという感覚から無力感に陥りやすい。したがって、当初の不安が収まり、ある程度落ち着いてからの心理的支援としては、子どもたちの自信を取り戻すため、コントロール感を育てるような試みが重要とされている。自尊心やコントロール感は人間にとって重要な意味を持ち、また近年の研究知見では身体的な健康にさえ関連することが確認されている。したがって、受けた支援にお礼を言う立場ばかりを経験することは、子どもたちの自己の発達にとってけして望ましいことではないといえよう。

出典：『「現代人のこころのゆくえ 6」-ヒューマン・インタラクションの諸相-』（東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター(HIRC 21)編集兼発行，2019 年） 出題の都合上，一部改変した。

問 1 下線部(1)で、著者は心理的支援の際にも同じようなことが生じていないかと問題提起をしている。ここでいう心理的支援と「同じようなこと」とはどのようなことか、本文に即して説明しなさい。(400 字程度)

問 2 下線部(2)で著者がいう「現地の役に立つ支援」とはどのようなものか、本文に即して簡潔に説明したうえで、被災者支援についてのあなたの考えを述べなさい。(600 字程度)





